不思議の森の裁判

田中敏郎　文
建石修志　画

不思議の森の裁判

田中敏郎　文
建石修志　画

河出書房新社

不思議の森の裁判

1996年3月15日　初版印刷
1996年3月25日　初版発行

文　田中敏郎
画　建石修志
発行者　清水　勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2－32－2
電話　(03)3404-8611〔編集〕　(03)3404-1201〔営業〕
振替　00100-7-10802

印刷　株式会社亨有堂印刷所
製本　小泉製本株式会社
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan　©1996
ISBN4-309-26277-5

ゲームの規則

序章　闇夜の森で　11
第1章　正体不明の招待状　12
第2章　迷路（右は左で、左は右）　23
第3章　嘆きの大海亀　30
第4章　「紫文書」　37
第5章　裁判開始（わしがわしがのがをすてて、おかげおかげのげでくらせ）　41
†大鷲の証言
†小鷲の証言
†大伯父鷲の証言

第6章　うさぎ、うさぎ、なぜなぜ跳ねる　56
†三つ子うさぎの証言（その一、つまらない前口上）
†三つ子うさぎの証言（その二）
†三つ子うさぎの証言（その三）
第7章　時間と場所の鑑定　70
†針鼠の鑑定
†土竜の鑑定
第8章　休廷（脳味噌の盆踊り）　90
第9章　裁判再開（名なしの墓）　96
†大梟の証言（その一）
†大梟の証言（その二）
†大梟の証言（その三）
†大梟の証言（その四）
第10章　消滅の歌　111
†エゾオオカミの証言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第11章　裁判終了（ジダンダンス）　116
第12章　弁護人登場（王様の部下を総動員しても）　123
第13章　「緑文書」　128
第14章　何処へ　135
第15章　ダイナへの手紙（猿丸は二度ベルを鳴らす）　139
終章　ダイナ目を覚ます　&　あとがき　143
幻語学基礎講座　145
猿丸メモ（解読文と解読手順）

不思議の森の裁判

うつつでない　太郎ちゃんや
多くの花子ちゃんのなかへ　分け入って
束の間　まぼろしと遊ぶ

――――友川かずき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ゲームの規則（地底旅行社からのおしらせ）

――もぐら登場。

これから、みなさんを「不思議の森」にご案内するわけだが、その前に二、三注意事項を述べておかねばならない。

森では謎文字が記された紙片をめぐって「ことばの裁判」がおこなわれる。ところが、やっかいなことに証言者たちの「はなしかた」が不可解千万。

最初は「∀∃§？√￣Å∵≒⊇……」、こんなふうにしか聞こえないかもしれないが、「ことばの法則」を見破って、動物たちの証言を聞き取っていただきたい。

ツアー初参加の方のためには、「幻語学基礎講座」（巻末）が開講されているし、随時、各論の講座もおこなわれる。さらに、ダイナのように「面倒なことって大嫌い」なひとには原文と解読手順を記した「猿丸メモ」も公開されるはずだ。ことばがわからなくても、迷子になる心配はご無用。

滞在期間は、１時間半から３カ月以上？　ひとそれぞれ。子どもから大人まで年齢制限なし。現地集合、現地解散。

携行品はエンピツと消しゴム、ワープロ持参も結構（証言によっては、置換機能を上手に使うと便利）、それに両のポケットにスピリッツとアスピリン、エスプリとエスプレッソを。

そろそろ、アリスにも招待状が届けられているころだ。

では、不思議の森でお会いしよう。

――もぐら退場。

序章　闇夜の森で

「よい時に来てくれた。お前さんに知恵を借りたいことができて、明日にでも、呼びにやろうと思っていたところだ」
「いや、こちらも相談したいことがあってね」
「あれから連絡がはいったのか」
「うん、そうなんだ」
　真っ暗な森の中、二つの影が出会い、額を突き合わせるようにして何事か相談を始めました。話し合いは夜明けまで続きましたが、森は深い眠りに沈み、話を聞いているのは、目を覚ました傍らの橡の木のほか誰もいませんでした。

第一章　正体不明の招待状

森にはふかいふかい霧がたちこめていました。

細い銀色の糸に吊るされた木馬は、次第に勢いを増しながら、白い闇のなか、大きな弧を描いて飛んでいきます。濃密な森の香りに溺れそうになりながら、アリスは、振り落とされまいと懸命に赤い木馬の耳につかまっていました。

どのくらいの時が経ったのか、木馬がなん回転したのか、霧のせいで見当もつきませんでしたが、それでも、舞い上がり、舞い降りながら空を切って飛ぶ荒馬をなんとか乗りこなせるようになって、歓声をあげようとしたその瞬間、アリスは木馬から転げ落ちそうになりました。アリスと同じように木馬にまたがった何者かが、霧の切れ目をよぎるのが目に入ったのです。

物の怪(け)めいたその影は、よほど乗りなれているのか、競馬の騎手のように腰を上げ、小枝を鞭のように振りかざしています。これではすぐ追いつかれてしまう。木馬にしがみついたアリスは夢中で馬の胴を踵で蹴ってみましたが、ただこつこつと音を立てるだけで、

わずかながらもスピードが増したとは思えません。

一方、相手の速いことといったら！　ちらっと振り返ってみると、すぐ近くまで迫ってきているばかりか、青い色の馬を駆る「それ」は鞍の上で逆立ちをしているではありませんか。蒼い馬！　アリスは最近読んだ恐ろしい物語を思い出しました。蒼い馬に乗るのは死神……。

しかし、ところどころペンキのはげた木馬に乗って追いかけてきたのは、まんまるい目をした小柄な猿でした。手綱を巧みに操ってアリスの横にぴたりとつけると、その猿は、にやりと笑って、白い封筒を差し出しました。アリスはとっさにその封筒をつかんだのですが、バランスを崩すと、とうとう地面に向かって墜落してしまいました。

アリスは床に座り込んで、しばらく呆然としていました。見回せば、いつもどおりの自分の部屋です。窓際の「大鴉」と名付けた黒い勉強机の上には読みさしの本が開いたままになっているし、椅子の上では飼い猫のテレスがわざとらしく背を丸めてあくびをしています。そうだわ、夢を見ていてベッドからおっこちたんだ。頭を二、三度振って立ち上がろうとして、初めて、左手がしっかりと封筒を握っているのに気がつきました。

夢のなかの霧が一気に部屋中に広がるのを感じながら、アリスは目をこすりました。

封筒の表には大きく「アリスさまへ」と書かれ、裏には、「森の書記長　猿丸」と緑の

インクで記されていました。封筒は湿り気をおび、金釘流の文字のはしばしは滲んでいます。アリスは急いで封を切ると、中に入っている二通の紙片を取り出しました。

最初の紙には、飾り立てた文字で、「招待状」と書かれていました。

招待状

謹啓

お日柄もよろしゅう、アリスさまには、ますますご清栄の段、大喜びいたしておりやす。突然の手紙で、驚かれたことと存じやすが、ぜひともあなたさまのお力をお借りいたしたく失礼を顧みませずかようなお手紙をさしあげまする次第です。申し遅れくしよがわたおしは、書記長ゐ猿丸でてちくせ。あぬやぬ**よ**きむへひむも**ろ**、んはみこゐはにすふおはのんえあす**み**きむいそわもすゐゑへち**え**てちくみえふさすみきむはひれゐねるゐふせふへ**ろそ**わんゐゆん**み**すはふたてちれむいむ。ふゐきんみかてぬねやこるんやはそ**お**けみかむをよおみ**わ**、ひちゐみかさとかむははす**も**なたよゐろみ**ふ**おへむ**も**す……。んくみそたんみくみよ。て**よ**み**ふ**へろあえのさ、ふす**ろ**す、を**わ**けみ**さ**ゐひちはのさくみえ、ゑくおあす**み**きむあすつす**け**ちは、**ま**すみきおはみえわそれむ**れ**むみおひもん**よ**んねぬあん**ろ**す**わ**のふねをたぬふへはねちくみよ。へふい**え**、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com